

～ 抄 録 ～

〔論 説〕

句動詞に見られる同義性

—get及びgoの事例—

高 木 道 信

Jespersen (1946) は「世界のほとんどすべての言語において, go, go away の意を表すか, 俗語で同様の意味をもつ語 (句) は, 転義されて<死ぬ>の意をもつ」と指摘し, go away, peg out などの句動詞を挙げている. 小論では, 動詞get及びgoに導かれる句動詞に対応する同意語 (句)・類義語 (句) の用例を中心に, 同義性のメカニズムを探った.

CCPVには以下のような情報が見られる (引用した解説の前に, ●印と通し番号を付して, 各句動詞の弁別的特性を処理しやすくした) :

< 2 > ● **Pursue** is a more formal word for **get after**.

< 3 > ● **Get on** means almost the same as **get ahead**.

例< 2 >は, <get + 副詞 [前置詞] ≡ 1 語の動詞>のタイプである. この解説から固有素性を抽出し, <get after + [+ more formal] = pursue>, ないしは単に<get after = pursue>のように簡略化して特性を示した. getを中心に見た場合, 例< 3 >におけるように<get on ≡ get ahead>の関係があり, このタイプを小論では<AxAy型>と仮称した. 次のようなget以外の動詞と類義となる<AxBx型>のタイプでは, 不変化詞を中心に動詞を比較検討した:

<18> ● **Call in** means almost the same as **get in**.

<37> ● **Fall to** is a literary expression for **get to**.

文脈素性に関しては, ODPVから得た主語・目的語に関する情報を整理し比喻性について寸言した. 句動詞にも字義性と比喻性の対立関係がある:

A) The police **went into** the house.

B) The police **went into** the matter.

英語教育の現場においては, 「下線部はそれぞれ1語で, <≡ entered><≡ investigated>と書き換えられる」との解説に止めるべきであろう. 「A) は<verb + preposition>でB) は<verb + adverbial particle>である」との解説は, 上位生を対象としたものであろう. 後続前置詞の難易さに関しては, Bolinger (1971) の主張を引用したが, 小論で波線を施した例文の扱い方は, 論じ残された問題である.

意欲なき学生群を前提とするひとつの教育理念

川口 顯弘

学習意欲が欠如している大量の学生群を相手に、はたしてどんな授業が可能だろうか。私見によれば勉強意欲をもたぬ学生相手の現下一般の授業は、「ごっこ授業」であるか「多数派黙殺（見殺し）授業」の二つしかない。両者はともに本物の教育とは言えないが、少なくとも前者については、これを単に否定するのではなく、積極的に評価すべきである。

たとえば見かけ上は多少の努力や勉強（一例。インターネットで検索させる）を要求し、それなりの達成感や満足感を味あわせつつ、じつは予習も復習も必要ではないため学生にとっては全然なんの苦労もない授業を想定してみよう。いわばただの遊びに過ぎないこうした授業（勉強ごっこの「ごっこ授業」）には、どんな学生も容易に授業参加が可能である。しかしその結果、授業自体に対する関心が芽生え、その中からさらに本格的な勉学を志すものが必ず現れるとすれば、こんにち我々に可能な唯一の教育は、この方法による以外ないのではないか。我々としても伝統的な授業に対する未練は断ちがたいものがあるが、現状を直視し、敢えてこの「ごっこ授業」をより効果的に推進すべきである、と私は考える。

Collocations with the Synonymous Verbs *Remember*, *Recollect* and *Recall*

Elliott, Warren R.

今回の研究はいくつかの重要な動詞とその類義語の使い方について行った。この論文は動詞のrememberと類義語 recollect 及びrecallに焦点を置いた。この調査の目的は、どのコロケーションが容認できるか、どの動詞と共に使えるかという点で、ネイティブ・スピーカー・インフォーマントの間に意見の一致があるか否かということである。10人のネイティブ・スピーカー（アメリカ人4名、カナダ人1名、英国人3名、オーストラリア人2名）に行った調査は一致よりむしろ相違を示す結果となった。相違が国籍によるという圧倒的な根拠はなかったが、北米英語の方が、イギリス英語やオーストラリア英語よりコロケーションを容認する傾向にある。ネイティブ・スピーカーが一致しないという事実を知れば、日本人英語教師や英語を学ぶ日本の学生にとって、何が正しい使い方かどれが誤った使い方かを区別したり、推量することさえ非常に難しいことである。

深見玄岱について

—近世日本における中国語の受容に関する一考察—

朱 全 安

本論考では、長崎唐通事の家系の出身者で、後に幕府の儒者として新井白石・室鳩巢ら木下順庵門下の同学と同時期に活躍した深見玄岱を取り上げ、従来、書家としてしか注目されてこなかった彼が、実はその中国語能力によって学問と実務において活躍し、江戸時代の中国語の受容史における長崎唐通事の流れと内地の儒学者の流れを結び付ける役割を果たしたことを明らかにした。

Putting a Speaking Skills Syllabus Together

ROBSON, Graham G.

Making a speaking syllabus is not simply about choosing a textbook and teaching it. Because of the individual differences of each class and student it is necessary to start from an analysis of students' needs and possible workplace constraints and advantages. Next the syllabus must be grounded in second language theory to manipulate and reinforce the conditions for optimal learning. Only when these important elements have been addressed can the actual class-by-class syllabus be produced. In this paper an example of the creation of a full academic year speaking syllabus is presented. The syllabus was designed for students at Chiba University of Commerce. It starts from student analysis and finishes at a final breakdown of the twenty-eight classes, making up one academic year. This paper may act as a basic model for creation of similar syllabuses, highlighting important theories that may be included in the production of such a syllabus and how each stage of syllabus production leads onto the next.

各クラスの違いのためスピーキングシラバスを作ることは教科書を選び、教えるだけではない。学生の最適な条件を理解し補強するなどしてシラバス第二言語理論に基づいていなくてはならない。学生にとって必要なものは学ぶ環境を整える、理解することによって理論に基づくスピーキングシラバスを製作することができる、この論文は例として千葉商科大学でのシラバス28レッスン（一年間）を通していかにシラバスのプロセスが次に何を導くかを基本的なモデルとしてシラバスの理論を示した。

Kate Chopin's *The Awakening* in the Cultural Context: Edna's Awakening between Cultures and Settings

馬 上 紗矢香

Kate Chopinによる*The Awakening* (1899)にはEdnaの生まれ育った土地、そしてクレオール社会の二つの文化が登場する。本稿ではそれら二つの異なる文化、そして作品中の舞台の変化について精読した上で、Ednaの目覚め、入水についての分析を行う。まず対比点について考える前に、両文化の女性に対する共通意識について論じている。アメリカ人であるEdnaの文化背景とアメリカ的と言うよりはるかにフランス的であるクレオールの文化の共通点を探るために本稿では19世紀アメリカ社会で女性に求められていたいくつかの概念とクレオール社会の比較を行う。続いてクレオール文化とEdnaの育った文化の違いについて考察を試みる。Ednaの回想、そして彼女の父の様子などから、Ednaの故郷では何事にも真剣であること、自己の感情を表に出さないことなどをうかがうことができ、Ednaも家族同様、これらの性質を持った人物として描かれている。一方クレオール社会は貴族的な生活、騎士道愛、女性の美、そして開放的な性格などによって特徴づけられる。二文化を比較してみると対照的な点が目立っており、これらの違いからEdnaはクレオール社会で孤立するが、一方でそのロマンスや自由に感情を表現する性格にEdnaは惹きつけられ、自己の内面に気づき、社会の女性観に逆らっていくのである。また、Ednaの変化に寄与したのは文化間の相違だけではなく、作品中の舞台の変化も大いに役立っている。クレオールの女性社会であり、Ednaがそれに触れることで自己に気付くGrand Isle、幻想的な雰囲気の中、おとぎ話のような描写やEdnaの本能的行動が強調されて描かれるChênère Caminada、そして家事や社会慣習といった制約が多く存在し、女性は家の中に閉じ込めてしまうNew Orleansといった3つの舞台の比較も行う。これら二つの文化の共通点と相違点、さらには舞台の変化といった文化背景について確認した上で、本稿では最後に主人公Ednaの「目覚め」について論じている。Ednaは確かに自己の本質と欲望には目覚めたが、いくつかの点で目覚めていないと言う事も確認できる。文化的差異、舞台の変化がEdnaを何に目覚めさせ、何に対して盲目であったのか。これらを明らかにすることで彼女の結末について分析を試みる。